

理事長退任のあいさつ

大阪大学
祖父江 友孝

2022年1月27日をもって日本疫学会理事長を退任しました。2018年以来、2期4年を担当させていただきましたが、学会員皆さまのご協力、学会事務局の支援のお陰で、概ね大過なく役割を終えることができました。改めてお礼を申し上げます。特に、事務局の西野さんには大変お世話になりました。

就任期間中、実施した主な事項としては、①将来構想検討委員会報告に沿った委員会の再編成、②副理事長(2名)の指名と毎月のミーティングの定例化、③疫学専門家制度の導入(尾島委員長)、④新型コロナウイルス関連情報特設サイトの開設と関連する活動(金子委員長)、⑤JEの発展(松尾委員長)、⑥学術総会初日に公募によるプレセミナーの開始(本庄WG長)などがあるかと思います。このうちの③～⑥は、各委員長・WG長の奮闘努力の成果です。前職の磯先生の時代は、事務局固定(2013年)、法人化(2015年)、WCE埼玉(2017年)と、ビッグイベントが次々と起こりましたが、私の就任期間は、こうした予定されたイベントとしては、比較的平穏な時期だったかと思います。ただ、予定していなかったCOVID-19については、種々の局面で大きな影響を受けました。学術総会としては、2020年京都(中山健夫先生)での緊急対応から始まり、2021年佐賀(田中恵太郎先生)、2022年千葉(近藤克則先生)と完全オンライン開催となったので、影響

を受けずに実施できたのは2019年東京(津金昌一郎先生)だけだったことになります。また、学会としてもタイムリーな対応を求められる懸案も多く、理事会の先生方には休日を含めWebでの会合に参加していただくなどの負荷をかけることになりました。ただ、疫学が方法論の学問なので、個別具体的な課題へのコミットの仕方がなかなか難しい点もあり、対応が不十分な点も多々あったかと思います。

私自身、それほど強いリーダーシッ

プをとるキャラクターでもないのに、就任期間中心がけたのが、ものごとをみんなと相談して決める仕組みを作るという点です。具体的には、毎月副理事長(玉腰先生と三浦先生)と事務局(西野さん、糟谷さん、北村先生/喜多村先生)とミーティングをする、理事会で協議事項をきちんと議論する(よく長引いてすみませんでした)、委員会活動を活発化する、などです。2018年2月に理事長就任時の挨拶での「頼まれたことを断らない、default yesの精神でお

CONTENTS

理事長退任のあいさつ	祖父江 友孝 1	日本疫学会奨励賞を受賞して	久松 隆史 8
理事長就任にあたって	玉腰 暁子 2	特集 JE×COVID-19! 掲載論文とともに	
第32回日本疫学会学術総会を終えて	近藤 克則 2	2年間のコロナ禍を振り返る	
疫学セミナー2022 開催報告	亀田 義人 3	～松尾恵太郎先生、編集委員長お疲れさまでした企画～	9
学会連携推進委員会 禁煙推進学術ネットワークWG企画「社会格差としてのタバコその解消に向けて」のご報告	片野田 耕太 4	Journal of Epidemiology編集委員長退任にあたって	松尾 恵太郎 9
日本疫学会プレセミナー2022 開催報告	本庄 かおり 5	新型コロナウイルス流行下における市民のメンタルヘルスの変化	菊池 宏幸 10
「第27回疫学の未来を語る若手の集い」開催報告	田中 宏和 6	無症状の新型コロナウイルス抗体陽性者数はPCR陽性者の3-7倍	小原 道法 11
一般社団法人 日本疫学会 各種賞の贈呈	6	川崎病とCOVID-19	勝又 庸行、原間 大輔 12
2021年度奨励賞選考委員会からの講評	7	事務局だより	13
日本疫学会奨励賞を受賞して～政策に役立てる記述疫学研究～	伊藤 ゆり 7	編集後記	13

願いたい」との点についても、私の関与する範囲内ではきちんと守っていただいていたように思います。

玉腰理事長、井上副理事長、関根副理事長、菊池事務局長の新体制のもと、玉腰先生には、初の女性理事長として

一層の活躍を期待します。4年間の任期中、ありがとうございました。

理事長就任にあたって

北海道大学
玉腰 暁子



今年初めの総会で、祖父江友孝前理事長から理事長のバトンを受け継ぎました。疫学は、新型コロナウイルス感染症拡大以来、これまでに増して社会に注目される学問領域となっています。私にとっても疫学は自身の研究の中核を構成する学問です。今回、このような大役を仰せつかり、身の引き締まる思いであります。

学会の役割として、様々な立場の研究者が集い、自由に意見交換ができること、さらにはそれが好循環を生み出すことが重要であると思います。疫学の性質上、この学会に集う研究者も多様で、予防、臨床、看護、介護の分野のみならず、栄養や運動、理論・統計学、また広く心理学、社会科学、政策学等の文化系の学問や実践の分野にわたっています。一次予防、二次予防、三次予防の各段階が、体質や環境、生活習慣等の観点から取り扱われますので、

共通した研究基盤の充実、質の高い研究者の育成と交流が求められていると考えます。一方で、人を対象とする以上、社会倫理的な側面を抜きに疫学研究を行うことはできません。対象者集団との対話を通じて研究への理解を促すとともに、研究成果を地域に還元し施策に反映させることが重要となっています。そのためには、学問成果の発出にとどまらず産官民と連携した実装も求められますが、疫学会の果たすべき役割は何かを常に考えながら一歩ずつ進んでいきたいと存じます。

2018年に10年後のあるべき姿を見据えて公表された将来構想検討委員会の報告(活動方針)に基づき、今期はこれまでの体制を大きく変えない形で運営していく所存です。とはいえ、社会情勢も大きく変化し、先には書きましたように社会から疫学への注目・期待も大きくなっています。そこで、これまで会

員の皆さまが積み上げてきた研究や新型コロナウイルス感染症対策をはじめとした喫緊に求められる研究、そしてそれらの実践を堅実に進めていくために、新たに学術委員会を発足させました。さらに今期は、報告書に示された指標に基づき中間的な評価を行い、必要に応じて体制等も見直していきたいと考えています。事務局体制については、2013年に東京に固定化され安定してきていますので、今期はこれまで理事長の所属から選出していた事務局長を東京医科大学の菊池宏幸先生にお願いしました。副理事長は前体制と同様2名とし、国立がん研究センター 井上真奈美先生、富山大学 関根道和先生にお願いしています。

現状では会員の皆さまに直接ご挨拶することができませんが、どうぞ疫学のさらなる発展のため、お力添えくださいますようよろしくお願いいたします。

第32回日本疫学会学術総会を終えて

第32回日本疫学会学術総会 会長
千葉大学 予防医学センター 社会予防医学研究部門
国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部
近藤 克則



2022年1月26-28日に開催された(オンラインデマンド配信は3月13日まで)第32回日本疫学会学術総会が終わりました。記録しておくべきと思われる経過と概要を振り返りたいと思います。

本格的な準備を始めた2021年1月には、COVID-19パンデミックが始まってからほぼ1年経っていました。1年では収まらなかったスペイン・インフルエンザの史実を知って、もうしばらく

流行が続くと見込みましたが、2022年には現地開催ができるだろうと期待も込めて考えました。学会などのWeb開催が増えて、良い面もあるという声も増えていました。現地参加者数を会

場の定員に納めるための手間や会場費+配信費用など経費も嵩みますが、理事会の了承の下「現地+Webのハイブリッド開催」で準備を進めました。しかし、2022年1月6日の全国の新規感染者数が、9月以来となる4,475人となり、沖縄県など3県にまん延防止等重点措置が発令されました。その報道を受け、7日に理事長・副理事長とメール審議し、同日「現地開催は中止、オンラインのみ開催」とウェブサイトに掲示、メールでも連絡しました。どこかに出かけたくてうずうずしている会員とその御家族の旅行のきっかけになればと企画し(参加者数増も期待し)たディズニーランドの隣接ホテルでの開催は幻に終わりました。学会初日まで3週間で切った時点での急なキャン

セルなど、会員の皆さまにご協力・ご理解いただけたことに感謝します。

学術総会のテーマを「社会と疫学」とし、特別講演、シンポジウム、教育講演(表)では、いずれも社会と疫学の接点のテーマを取り上げていただきました。会長講演では、「社会と疫学」と題し、社会疫学研究を振り返り、現在進行形のゼロ次予防に向けた産官学連携による介入研究、社会実装、情報疫学などについて、今後の展開の可能性を述べさせていただきました。

一般演題数は325演題、登録者数は、1月12日時点で918人、3月9日時点で1,141人(会員775人、非会員183人、学生183人)となり、昨年を超えることができてホッとしました。最大同時視聴者数はメインシンポジウムの396

人でした(現時点でメインシンポジウム総視聴者数448人)。有志のご提案・ご協力で、急遽、オンライン懇親会も開催できました。主催者としては、赤字にならないか気がかりでしたが、現地開催がなくなったことで会場費や当日の運営費が浮いたこと、Webで3月までオンデマンドで視聴できたことから、有料の疫学セミナーに441人、プレセミナーに959人と現地開催では期待できない参加者数を得たことで、黒字決算にすることができました。

参加いただいた方々をはじめ、いろいろな形で協力・支援していただいた皆さまに感謝します。ありがとうございました。

表 主要プログラム

特別講演:「New directions for disaster research and social epidemiology」

Ichiro Kawachi教授(ハーバード大学公衆衛生大学院)

メインシンポジウム:「社会疫学から疫学の未来を展望する」

シンポジウム:

- 1 「災害疫学-減災・レジリエンスの疫学」
- 2 「ポスト/ウィズ“コロナ”時代の疫学-新型“コロナ”感染症からの教訓」
- 3 「出生コホートを基盤とする疫学研究の推進」
- 4 「社会格差としてのタバコ-その解消に向けて」
- 5 「暮らすだけで健康になる社会づくりと疫学」

教育講演:

- 1 「臨床研究に関する利益相反の考え方」
- 2 「Well-being・幸福と健康:疫学・予防医学研究への示唆」

疫学セミナー2022 開催報告

千葉大学
亀田 義人



第32回日本疫学会学術総会(2022年1月、近藤克則会長、千葉大学教授)において、疫学セミナー「人工知能で広がる疫学の世界」を開催いたしました。本企画は、疫学を学んでいる人がAI活用の取り組みを知ることにより、

研究手法、環境構築や研究対象などについての知見を広げ、疫学の世界を広げることをねらいとして実施されました。

はじめに中井悦司先生(Google Cloud、ソリューションズ・アーキテ

クト)に人工知能の基本的事項および現実的な機械学習の適用プロセス、説明可能なAI等についてご講演いただきました。続いて川上英良先生(千葉大学大学院人工知能(AI)医学教授)には説明可能性を高めるためのモデル

の近似・簡略化や疾患発症の予兆検知などの実際の医療領域での機械学習の研究事例を、奥村貴史先生(北見工業大学大学院工学研究科 教授)には、医療データを自然言語処理して利活用する際の課題や退院サマリの自動生成について、大田黒紘之先生(株式会社 ABEJA 機械学習エンジニア)にはセ

ンシングによるデータの蓄積、データを取りに行くプル型からデータが自然に収集されるプッシュ型への構造転換などについてご講演いただき、その後登壇者のパネルディスカッションで議論を深めました。

参加登録者は合計439名に上り、アンケートでは91%以上の方に満足をい

たきました。

[アンケート結果はこちら](#)

最後になりましたが登壇者の皆さま、ご参加いただいた皆さま、運営事務局および企画を任せていただいた近藤克則大会長にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



中井悦司先生



パネルディスカッション

学会連携推進委員会 禁煙推進学術ネットワークWG企画 「社会格差としてのタバコーその解消に向けて」のご報告

国立がん研究センター がん対策研究所
片野田 耕太



学術総会のテーマ「社会と疫学」という文脈でタバコに触れないわけはいかない、そういう思いで企画したシンポジウムです。本庄かおり先生(大阪医科薬科大学)と共同座長をさせていただきました。始めに田中宏和先生(三重大学)から、公的統計のリンケージで得られた喫煙率が(死亡率も)、社会階層と逆相関していることが示されました。ヨーロッパでは当たり前の公的統計のリンケージが日本では未だに困難である点も強調されていました。2番目の北野尚美先生(和歌山県立医科大学)からは、母子保健事業の縦断データから、若い妊産婦の喫煙率が高い実態が紹介されました。健康影響について知ってもらった上での行動変容を期待したい、というお話が印象的でした。3番目の桑原祐樹先生(鳥取大学)からは、中高生においても低

社会階層のタバコへの曝露が大きく、好ましくない生活習慣が集積していることが紹介されました。4番目の田淵貴大先生(大阪国際がんセンター)からは、加熱式タバコでも受動喫煙(エアロゾルの曝露)が低学歴層で多いことが紹介されました。タバコ対策は一時的に社会格差を拡大する可能性があるが、粘り強く対策を続けることですべての階層でタバコの被害を減らすことができるという、俯瞰的な話もされていました。最後の齋藤順子先生(国立がん研究センター)からは、職域における禁煙介入の取り組みが紹介されました。事業所の意思決定の仕組みにも踏み込んだ普及実装科学の

手法が興味深かったです。モニタリングだけでなく、個人あるいは社会への介入の方向性まで議論するよい機会になったと思います。次回の学術総会にも期待いただければ幸いです。



日本疫学会プレセミナー2022 開催報告

大阪医科薬科大学
本庄 かおり



第32回日本疫学会学術総会(2022年1月、近藤克則会長・千葉大学教授)において、「日本疫学会プレセミナー」を開催いたしました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成・研究力の向上に資するセミナーや演習の機会の提供を目的に実施されました。今回も、総会と同じくオンライン開催とさせていただきます。

日本疫学会プレセミナー実施にあたっては、日本疫学会の会員からセミナー企画・実施者を広く公募し、申請のあった企画の中から、疫学専門家・人材育成委員会 疫学教育推進WGが下記の企画を選定しました。今回のプレセミナーはライブ配信と総会終了後のオンデマンド配信の両方の形態での開催のため、複数のセミナーを受講される方も多くおられ、参加者募集の直後から大変多くの申し込みがありました。

企画1. いま改めて「欠測データ」の解析について考える

(中・上級レベル)

【企画・座長】

伊藤 ゆり(大阪医科薬科大学 研究支援センター 医療統計室)
篠崎 智大(東京理科大学 工学部 情報工学科)
手良向 聡(京都府立医科大学大学院 医学研究科 生物統計学)

【講師】

篠崎 智大(東京理科大学 工学部 情報工学科)
坂巻 顕太郎(横浜市立大学 データサイエンス推進センター)
福井 敬祐(広島大学 先進理工系科学研究科)

【チューター】

石井 亮太(筑波大学 医学医療系)
小向 翔(大阪大学 医学系研究科 情報統合医学講座)
市瀬 雄一(国立がん研究センターがん対策研究所医療政策部)

【共催】日本計量生物学会

【参加人数】630名

企画2. 査読のいろは

(中・上級レベル)

【企画・座長】

長嶺 由衣子(東京医科歯科大学医学部附属病院 総合診療科)
陣内 裕成(日本医科大学医学部 衛生学公衆衛生学)

【講師】

今村 文昭(ケンブリッジ大学医学部 MRC疫学ユニット)

【参加人数】324名

今回は、ハイブリッド開催の企画からオンライン開催への急な変更でしたが、主催の皆さまのおかげで大きな問

題もなく実施することができました。今回のプレセミナーにも大変多くの皆さまに参加いただきました。参加者アンケートの結果から、94%の方が今回のセミナーは期待通りであったと評価され、97%の方が今後もこのようなセミナーに参加を希望されていました。また、94%の方が今回のセミナーがご自身の研究に役に立ったと回答されています。「講義で疑問点が解消できたうえ、新しい視点が得ることができとても有益な時間でした。」「とてもわかりやすい講義でした。」「査読の経験が豊富な方のお話を伺うことができ、貴重な機会でした。」といった声も寄せられました。今回は2回目のオンライン開催となりましたが、80%以上の参加者がWEB開催に満足だと答えてくださいました。今後も、学術委員会疫学教育推進WGでは、会員の皆さまにこのような講習や演習などの学習の機会を提供できるよう努めたいと思います。

最後になりましたが、企画を主催してくださった先生方、また、第32回日本疫学会学術総会、近藤克則会長ならびに事務局には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「第27回疫学の未来を語る若手の集い」 開催報告

三重大学
田中 宏和

第32回日本疫学会学術総会初日の2022年1月26日に「第27回疫学の未来を語る若手の集い」を昨年に続きオンライン開催いたしました。今回のテーマは「若手疫学者への処方箋～そこが知りたい！普段は聞けないあんなことこんなこと…まとめて先輩に聞いてみよう～」としました。コロナ禍で研究の進め方やキャリアパス・ワークライフバランスについて先輩に相談する機会が減ってしまった若手研究者向けに、4名の先生方を講師としてお招きし、事前に寄せていただいた質問に回答していただく形式を取りました。杉本南先生（東京大学）はポスドクの立場から博士課程時代の経験や最近出産された経験を踏まえたお話を、天笠志保先生（東京医科大学）は若手研究者として

のモチベーションの維持や研究を發展させていくコツなどを中心にご回答をいただきました。また、黒谷佳代先生（昭和女子大学）は研究者としての転職経験や大学教員としての今後の将来像などをお話しいただき、田淵貴大先生（大阪国際がんセンター）には院士や若手の指導経験を踏まえた研究グループの發展のさせ方や論文執筆のアドバイス、データサイエンスを核とした疫学の明るい未来についてお話しいただきました。当日は大学院生・若手研究者を中心に131名の参加があり大変熱心に視聴していただき、事後のアンケートでも「身近にこのようなお話を伺える方がいなかった

め、大変貴重な機会となりました」や「興味深い研究紹介と演者の皆さんの研究や私生活に対する想いを聞けてよかった」などのお声を頂戴することができました。最後になりますが、今回ご登壇いただいた4名の先生方、またご参加いただいた方々に厚く御礼申し上げます。



一般社団法人 日本疫学会 各種賞の贈呈

第32回日本疫学会学術総会（オンライン開催）において下記のとおり、各種賞の贈呈が行われました（敬称略）。

功労賞



田中 恵太郎
(佐賀大学 医学部)

奨励賞

伊藤 ゆり (大阪医科大学 研究支援センター)
久松 隆史 (岡山大学 学術研究院)

Best Reviewer賞

中谷 直樹
(東北大学
東北メディカル・
メガバンク機構)



大庭 真梨
(国立精神・神経医療
研究センター)



大谷 隆浩
(名古屋市立大学大学院)



Paper of the Year

井上 陽介 (国立国際医療研究センター)

Loss of Working Life Years Due to Mortality, Sickness Absence, or Ill-health Retirement:
A Comprehensive Approach to Estimating Disease Burden in the Workplace
<https://doi.org/10.2188/jea.JE20190332>



2021年度奨励賞選考委員会からの講評

2021年度日本疫学会奨励賞の受賞候補者に推薦いただきました先生方は、昨年度に引き続き皆さま非常に優秀で、高いレベルでの選考となりました。その中で研究業績、社会的インパクト、将来性、日本疫学会での活動状況や同学会への貢献などを総合的に評価し、今年度の受賞者2名を決定しました。

残念ながら今回は選考されなかった候補者の先生方も、今後の活動次第で次回以降十分にチャンスがあることはぜひご理解ください。現時点では、キャリアの初期段階でまとまった成果を出すに至っていない、独自研究の構築に至っていない、あるいは日本疫学会での活動や業績が十分ではないなどが受賞に届かなかった主な理由ですので、参考にしていただけると幸いです。今後に向けてさらに、独自の研究を展開することや、日本疫学会での積極的な活動、業績などを蓄積して、再度の挑戦を期待しています。今年度もレベルの高い選考となりましたことは、日本疫学会を支える若手・中堅の先生方が今後益々活躍いただけることの証左で、選考委員一同大いに頼もしく思っているところです。

【奨励賞受賞者のご紹介】

奨励賞を受賞された伊藤ゆり先生と久松隆史先生に、受賞の喜びや今後の抱負についてご寄稿いただきました。

日本疫学会奨励賞を受賞して ～政策に役立てる記述疫学研究～

大阪医科薬科大学 医学研究支援センター 医療統計室 室長・准教授
伊藤 ゆり



この度は栄誉ある日本疫学会奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。理事長の祖父江友孝先生、学会長の近藤克則先生、選考委員の先生方、またご推薦いただきました松尾恵太郎先生に感謝申し上げます。

初めて疫学会で発表した際にはがんの記述疫学に関する発表はあまりなく、ほとんどが大規模コホート研究による分析疫学に関する発表だったため、アウェイ感を感じていました。しかし、疫学の未来を語る若手の集いに参加するようになり、同じ世代の異なる研究分野の仲間たちとキャリアに対する不安や共同研究の話など、酒を酌み交わしつつ、大いに語り合ったことが、現在の

自分の糧になっていると感じています。

記述疫学的重要性を学んだのは、最初の勤務先であった大阪府立成人病センター（現・大阪国際がんセンター）において、大阪府のがん対策に関わったことがきっかけでした。分析疫学や臨床医学のエビデンスをいかに地域住民に還元し、がんによる死亡を効率よく減少させるかというPopulation Healthの視点を学ばせていただきました。また留学先であったロンドン大学衛生学・熱帯医学校のがん生存解析グループにおいて、がん患者の生存率における社会経済格差について学んだことも、現在の研究テーマの源流となっています。

近年は、がんのみならず、広い視点

で健康格差の記述疫学をテーマに、多分野の先生方とともに、公的統計を活用した研究を行っています。また、これまでの疫学の英知を集め、健康政策に役立てるようなマイクロシミュレーションの実装などにも力を注いでいます。この度いただきました奨励賞に恥じぬよう、気持ちを引き締め、引き続き政策決定に活用される記述疫学研究に取り組んでまいりたいと思います。最後に、ご指導いただいた先生方、がん登録の皆さま、共同研究者の先生方、留学先をご紹介いただいた先生方、若手の会世話人同期など、支えてくださった皆さまに改めまして深く御礼申し上げます。

■プロフィール

2007年3月大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻において博士（保健学）取得。同年4月よりがん研究振興財団リサーチ・レジデントとして大阪府立成人病センター（現・大阪国際がんセンター）に勤務。2010年4月より同センター研究員・主任研究員を経て、2018年4月より大阪医科大学研究支援センター医療統計室・室長兼准教授として着任。専門分野は疫学・保健統計。現在、大阪医科大学で医師や教員、学生に医療統計支援を行う傍ら、がん対策や健康格差に関する研究に従事。

日本疫学会奨励賞を受賞して

岡山大学学術研究院医歯薬学域公衆衛生学分野
久松 隆史



この度は大変栄誉ある日本疫学会奨励賞を賜り、理事長の祖父江友孝先生、学会長の近藤克則先生、そして選考委員はじめ学会の諸先生方に心より御礼申し上げます。

私は約10年にわたる循環器内科医としての臨床経験を経て心筋梗塞・脳卒中をはじめとする循環器疾患の予防の重要性を再認識し、大学院修了後は、滋賀医科大学アジア疫学研究センター、島根大学医学部環境保健医学講座、米国Northwestern University Feinberg School of Medicine、そして岡山大学学術研究院医歯薬学域公衆衛生学分野において、一貫して循環器疾患の予防に関する疫学研究に取り組んでまいりました。臨床医から予防医学・疫学研究の研究者へ転身するきっかけとなりましたのは、大学院時代における滋賀医科大学社会学講座公衆衛生学部門での予防医学・疫学研究に対する深い学びと三浦克之先生・上島弘嗣先生はじめ同門の先生方の温かいご指導のお陰です。その後、滋賀医科大学アジア疫学研究センター所属時代には、岡村智教

先生、大久保孝義先生、有馬久富先生、村上義孝先生、藤吉朗先生、中村幸志先生、櫻井勝先生、等、疫学研究の第一線でご活躍されている経験豊富な先生方から疫学を一から学び実践する機会を得ました。その後、島根大学環境保健医学講座所属時代には、神田秀幸先生ご指導のもと、地域に根差したコホート研究の立ち上げ・運営に携わり、疫学的エビデンスにもとづいて、地域社会における知識の普及啓発、自治体政策への提言、社会実装など公衆衛生活動を積極的に行ってまいりました。さらには、国際共同研究や米国シカゴのNorthwestern University Feinberg School of Medicineへの留学の機会をいただき、世界で活躍する研究者と出会い、学ぶことでさらに自分の世界が広がりました。帰国後は、岡山大学に異動された神田先生のご指導のもと、また同門の先生方のご支援のもと、予防医学・疫学研究ならびに公衆衛生活動に継続して取り組んでおります。

私は、地域に根差した複数のコホート研究(滋賀県草津市・島根県益田市・

岡山県新見市)の立ち上げ・運営に継続して携わり、妥当性の高い標準化された調査に基づく偏りのないデータから、多彩な疫学的手法を用いて、特に循環器疾患の予防に関する質の高いエビデンスの創出に努めてきました。地域におけるコホート研究は、研究のみならず、公衆衛生活動を通じた社会貢献、そして社会医学フィールド実習や研究者育成など教育の場となります。これらコホート研究を通じて、これからも、研究、社会貢献、そして人材育成に一層精進してまいります。

最後になりましたが、日本疫学会奨励賞にご推薦いただいた神田秀幸先生、大学院時代から現在に至るまで継続して温かいご指導を賜っております、三浦克之先生・上島弘嗣先生・岡村智教先生・大久保孝義先生・有馬久富先生・村上義孝先生、藤吉朗先生・中村幸志先生・櫻井勝先生をはじめとする非常に多くの先生方、スタッフの皆さま、研究参加者の皆さまに心より御礼申し上げます。

■プロフィール

2003年 3月 滋賀医科大学医学部医学科 卒業
2013年 3月 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程修了(博士(医学))
2003年 5月～2005年 3月 滋賀医科大学医学部附属病院 内科医員(研修医)
2005年 4月～2008年 3月 日本赤十字社長浜赤十字病院 循環器内科医師
2008年 4月～2011年 3月 互恵会大阪回生病院 循環器内科医師
2011年 4月～2013年 3月 滋賀医科大学内科学講座 循環器内科医員
2013年 4月～2016年 3月 滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任助教
2016年 4月～2019年 12月 島根大学医学部環境保健医学講座公衆衛生学 准教授
2017年 2月～2019年 1月 米国Northwestern University Feinberg School of Medicine 客員研究員(日本学術振興会海外特別研究員)
2020年 1月～現在 岡山大学学術研究院医歯薬学域公衆衛生学分野 准教授

特集**JEXCOVID-19! 掲載論文とともに
2年間のコロナ禍を振り返る****～松尾恵太郎先生、編集委員長お疲れさまでした企画～**

COVID-19流行から早2年。この間、学術領域では、COVID-19の研究論文が約22万編公表されました（2022年1月末現在）。インフルエンザの論文数が約15万編であることを考えると、驚異的な数値です。そのような期間にJournal of Epidemiology (JE) の編集委員長を務められた松尾恵太郎先生が、2021年12月に退任されました。私自身も編集委員として携わせていただいていたことから、本特集では松尾先生にご寄稿いただき、大変な時期のJEへのご尽力に感謝を申し上げる場とさせていただきます。また、松尾先生が編集委員長の期間にJEに受理されたCOVID-19原著論文（国内研究）から3編をセレクトいただきました。著者の先生による論文紹介やメッセージとともに、2年間のコロナ禍を振り返りたいと思います。松尾先生、本当にお疲れさまでございました。そして、ありがとうございました！！

(編集担当 大阪公立大学・福島 若葉)

**Journal of Epidemiology編集委員長
退任にあたって**愛知県がんセンター がん予防研究分野
松尾 恵太郎

2017年より5年間編集委員長を務めさせていただき、昨年末をもって退任致しました。後半2年のコロナ禍を踏まえての企画に併せて、退任の挨拶を述べさせていただきたいと思います。まずは企画についてです。この2020-21の2年間ジャーナルへの投稿数が激増しました。激増の主たる理由は、コロナ関連投稿論文の増加でした。私は全投稿論文を一読後、編集委員にアサインするか否かを決めておりましたが、正直なところ、コロナ関係の論文のほとんどが他誌を落とされた後のもので、他のトピックの論文と比べ明らかに質の低い物が多かった印象を持っていました。2019年までの3年間、編集委員に回すかどうかで迷うことが多々ありましたが、後半2年は躊躇なくリジェクトできたのを覚えています。そんな中、フィルターを乗り越えた、本邦からの優秀な論文3編を本企画で紹介致します。①Kikuchi等の論

文は、引用数がもっともこの間で多かった論文です。②Sanada等の論文は、論文のアウトリーチの指標で用いられるAltmetricsが最も高かった論文です。③Katsumata, Harama等の論文は私が個人的に最も印象に残った論文として挙げさせていただきました。川崎病に関する論文ですが、コロナ禍が描き出すのはコロナだけではない、という点で非常に興味深く思いました。

後半は、企画を離れて純粋に退任の辞とします。私がJEを知ったのは、大学院1年の1999年、PubMed未収載、Impact Factor未付与だった頃です。失礼ながら掲載されても自身で喜ぶ、周りに喜ばれるジャーナルではありませんでした。そんなJEは、私が編集委員長を引き継いだ時には、その後の編集委員長、編集委員会のメンバーをはじめとする皆さま方の尽力によって、各種体制が整った信頼されるジャーナルとなっていました。私は当

時の磯理事長に、そのJEをさらに国際的に発展させるよう言い含められ編集委員長に着任しました。国際的な発展は当然として、私の心の中で掲げたもう一つの目標は、「JEを、掲載されたら祝福されるジャーナルにする」でした。2018年の疫学会将来構想ではJEは2023年まで最低限Impact Factor 3を維持等、幾つか数値目標をいただきましたが、おおよそクリアできました。国際化も編集委員会の完全英語化等も含め、多少は進んだと思っています。Elsevier離脱事件のような、二度と体験したくない出来事もありましたが、おおむね、時間と手間をかけた甲斐があったと思っています。「祝福されるジャーナル」になったか否かは、これを読まれる皆さまにお任せ致しますが、私自身はそういうジャーナルに近づけたと思っています。

最後に、私1人ではこのようなことはできなかったと痛感しています。

理事会、事務局、編集室、編集委員会メンバー、レビュワーの皆さん、そして

著者の方々の協力あつての5年間でし
た。全力で駆け抜けたつもりです。新編

集委員長の片野田先生の下、JEが益々
発展することを心から祈っています。

■プロフィール

1996年岡山大学医学部卒、2002年名古屋大院卒（医学博士）、2003年ハーバード公衆衛生大学院卒（疫学修士）。2003年愛知県がんセンター疫学・予防部にて疫学者としてのキャリアを始める。その後、九州大学教授を経て、2015年より愛知県がんセンター部長。2018年より現職。JE 8代目編集委員長。現在「日本多施設コホート（J-MICC）研究」等の主任研究者。専門はがん疫学・分子疫学。

新型コロナウイルス流行下における 市民のメンタルヘルスの変化

Kikuchi H, et al. Changes in Psychological Distress During the COVID-19 Pandemic in Japan: A Longitudinal Study. J Epidemiol. 2020 Nov 5;30(11):522-528.



東京医科大学公衆衛生学分野
菊池 宏幸

1：論文の紹介

COVID-19が世の中で危惧され始めた2020年2月下旬、および緊急事態宣言が出される直前の4月初旬の2時点で、関東地方在住の20歳から79歳の男女2,400人にインターネット調査を行った。その結果、両時点間でメンタルヘルス不良者（K 6 ≥13点）の割合は、全体で9.3%（2月末）から11.3%（4月初旬）と約2%増加し、特に低所得者（年収200万円未満）、呼吸器疾患患者で、悪化の程度が大きかった。今後、自殺など深刻な事態を避けるた

めにも、メンタルヘルス対策が重要となる。

2：論文執筆の動機

本論文は、2009年新型インフルエンザ（H1N1）発生時の経験をもとに執筆した。当時、私は保健所に保健師として在職し、発熱相談センター内で一日中電話対応をしていた。相談者の多くが、未知のウイルスに対する不安、怒り、恐怖、差別的感情を抱いていたことを記憶している。この経験を通じ新興感染症発生時のメンタルヘルス対策、特に支援を必要な人に素早く届け

る仕組みの重要性を感じていたことが、今回の論文執筆に至った。

3：今後の展望

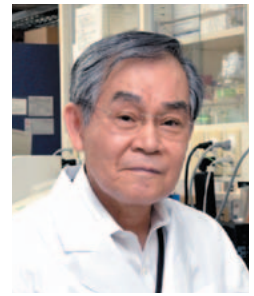
本論文では流行初期（2020年2～4月）での変化を扱ったが、それ以降、市民のメンタルヘルスがどのように変化するか、検討する必要がある。我々は2020年4月以降も対象者を追跡し、5-6週間ごとに1年以上継続して調査を行っている。現在、流行第2波以降の変化についても解析し、その結果をまとめた論文を、JEに報告する予定である。（in press）

■プロフィール

2002年大阪大学医学部保健学科卒業、2004年米国UCLA School of Public Health交換留学、2006年大阪大学医学系研究科保健学専攻卒業、2006-2015年東京都福祉保健局で保健師として勤務。2014年東京医科大学にて博士（医学）取得。2016年より現職。専門は、身体活動およびメンタルヘルスの疫学。疫学若手の会では、2010年～2019年世話人（2014～2018年代表幹事）を務めた。

無症状の新型コロナウイルス抗体陽性者数は PCR陽性者の3-7倍

Sanada T, et al. (Kohara M: Corresponding author) Serologic Survey of IgG Against SARS-CoV-2 Among Hospital Visitors Without a History of SARS-CoV-2 Infection in Tokyo, 2020-2021. J Epidemiol. 2022 Feb 5;32(2):105-111.



東京都医学総合研究所 感染制御プロジェクト 特別客員研究員
小原 道法

東京都立・公社14病院の外来受診者で発熱外来やコロナ陽性者を除外した無症状者の余剰検体を用いて、新型コロナウイルスの抗体を測定した。測定は2020年9月1日から2021年3月31日にわたって実施され、延べ2万3,234人の検体を用いて抗体陽性率を解析した。

2021年3月末までの年齢・性別・地域を補正した抗体陽性率は3.4%であった。今回解析したのは無症状者が対象なので、無症状のまま過去に新型コロナウイルスの感染が示唆された都民は3.4%で47万778人いた推計になり、

95%信頼区間 (CI: confidence interval) では36万1,100人～84万1,226人となる。この人数はPCR陽性者として発表されていた都民の3.9倍 (95% CI, 3.0-7.0倍) にあたる。

また、新型コロナウイルスの核蛋白質 (N抗原) に対する抗体は時間経過により低下しやすく、スパイク蛋白質 (S抗原) に対する抗体の方が長期に維持されることから、両抗原に対する抗体価を測定することが重要であることが示された。

<参考文献>

Sanada T. et. al.. Serologic Survey of IgG Against SARS-CoV- 2 Among Hospital Visitors Without a History of SARS-CoV- 2 Infection in Tokyo, 2020-2021: Journal of Epidemiology 2022 Volume 32 Issue 2 Pages 105-111. <https://doi.org/10.2188/jea.JE20210324>

■プロフィール

1973年3月 高知大学文理学部理学科生物専攻卒業、1986年10月22日 東京大学医学部 医学博士。1973年(財)日本ポリオ研究所 研究員、1982年北里大学薬学部公衆衛生学教室、1984年東京大学医学部細菌学教室、1989年東燃総合研究所・基礎研究所、免疫工学グループグループヘッド、1992年東京都臨床医学総合研究所 (現: 東京都医学総合研究所)、感染生体防御研究部門室長、プロジェクトリーダーを経て特別客員研究員。ウイルス病原性の分子生物学的解析、感染病態解析およびその制御研究を行っている。

川崎病とCOVID-19

Katsumata N*, Harama D*, et al. (* Authors equally contributed) Prevention Measures for COVID-19 and Changes in Kawasaki Disease Incidence. J Epidemiol. 2021 Nov 5;31(11):573-580.

山梨県立中央病院 新生児内科部長 勝又 庸行

山梨県立中央病院 小児科 原間 大輔

拙稿を松尾恵太郎先生に「記憶に残る興味深い論文」としてご評価いただき大変光栄に存じます。

わたしたちは川崎病の原因究明、合併症である冠動脈瘤の発生の抑制を目的として、2005年から山梨県内の全ての小児科入院施設で観察研究を行ってきました。今回、これらのデータを基に、COVID-19流行前と、COVID-19流行期における川崎病の発症率と、患者

の臨床的な特徴を検討しました。

その結果、COVID-19流行期では種々の小児の感染症の流行が抑制され、同時に川崎病の発症が例年よりも減少したことが判明しました。様々な感染予防策の徹底によって、感染症の蔓延が抑制されることで、川崎病が減少することが示唆されました。

コロナ禍で皆大変な思いをしていますが、逆にこの異常な状況を「川崎病

の発症要因に関する重要な疫学的観察の場」と捉え前向きな気持ちで研究を行うことができました。

川崎病の発症状況を“オール山梨”で把握してきた小児科医たちの努力をこのような形で評価いただいたことに感謝すると同時に、依然続いているコロナ禍でのさらなる調査に邁進したい思いを強くしました。

■プロフィール

名前：勝又 庸行（かつまた のぶゆき）

所属：山梨県立中央病院 新生児内科部長

山梨大学 小児科

略歴：2001年 山梨医科大学 医学部 卒業

2007年 小児科専門医 取得

2012年 山梨大学大学院 医学工学総合教育部先進医療科学専攻 修了

2012年～ 国立病院機構甲府病院 小児科勤務

2020年～ 現職



■プロフィール

名前：原間 大輔（はらま だいすけ）

所属：山梨県立中央病院 小児科

山梨大学 小児科

略歴：2012年 山梨大学 医学部医学科 卒業

2015年 山梨大学大学院 医学工学総合教育部先進医療科学専攻 修了

2017年 小児科専門医 取得

2018年～ 山梨大学医学部小児科 臨床助教

2019年～ 現職



事務局だより

1) 新事務局長紹介

今年度より、前任の北村哲久先生に代わり事務局長を拝命しました東京医科大学の菊池宏幸と申します。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。



私はこれまで、疫学会法人化準備委員会・定着委員会、また疫学教育WG委員、また若手の会世話人等として、活動して参りました。このたび事務局長という大命を仰せつかり、身が引き締まる思いです。

これまで事務局長は、理事長の所属から選ばれることが慣例でした。ですので、玉腰理事長からお電話で直接ご依頼いただいた時は、まさに青天の霹靂。あまりのことで、つい電話口で「うえええ!!!」と大声をあげてしまい、隣席の小田切先生まで驚かせてしまいました(笑)。

また、その電話で、玉腰理事長からは「東京事務局と、コミュニケーションをよく取ってほしい。」とのお話がありました。というのも、東京事務局では、これまで長く活躍いただいた西野雅子

さんがご退任されます。西野さんがいらっしゃった間、日本疫学会は、学会の一般社団法人化、選挙制度や専門家認定制度等の整備、各委員会活動の充実、学会会員数の増加等、目覚ましく発展してきました。これらの活動の裏には、いつも、西野さんの献身的なご活躍がありました。

西野さんがご退職された後も、この学会の良い流れを引き継げるよう、事務局員の糟谷里美さん、鈴木美香さん、中川光穂さんと力を合わせて、頑張っていきたいと思います。皆さまのご支援、またご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願いいたします。

2) ご登録情報更新のお願い

ご異動などによりご所属先や住所に変更のありました会員の皆さまは、会員登録情報の更新をお願いいたします。会員専用ページ(<https://coco.cococica.com/jea/>)にログインし、「登録内容確認・変更」をクリックして、ご登録情報を更新してください。

※ログインIDは、ご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定してください。

3) 日本疫学会奨励賞募集要項

日本疫学会奨励賞に関する細則にもとづき、以下の要件を満たす受賞者の推薦をお待ちしています。

- ・本会員のうち、優れた疫学的研究を行い、その成果を日本疫学会誌、Journal of Epidemiologyおよびその他の疫学関連学会や専門雑誌に発表し、なお将来の研究の発展を期待しうる者(原則として個人)
- ・受賞者は継続3年以上の会員歴を持つ本学会会員に限られ、受賞の暦年度の募集締め切り日において満45歳未満の者
- ・推薦書の提出期限は5月1日～6月30日で、原則として代議員(役員経験者を含む)からご推薦いただくこととなっております。

※詳細は学会HP(<https://jeaweb.jp/activities/award/shorei/index.html>)をご覧ください。

4) 日本疫学会会員数: 2,537名

(2022年4月1日現在)

名誉会員: 33名 代議員: 209名
普通会員: 2,504名

編集後記

この度、広報委員会副委員長を拝命し、最初のお仕事としてニュースレター第59号の編集を担当させていただきました。この時期恒例である学術総会の振り返りの他、祖父江前理事長および玉腰新理事長のご挨拶など、盛りだくさんの内容をお届けします。特集は、金子広報委員長から「ぜひコロナ関連で!」とご要望をいただきました。しかし、コロナと一口に言っても、日本疫学会の会員の皆さまは、疫学をベースに実に様々な課題に取り組まれています。テーマ選びが難しい…どうしよう?? そうだ、

JEにしよう!! ということで、松尾先生のJE編集委員長ご退任にあわせたコラボ企画とさせていただきました。

いつもは読む側のニュースレターですが、編集の立場となり、多くの方々のご協力で成り立っていること、その時々学会活動がこのようにして文字として残されていくのだな〜と、改めて感じました。ご寄稿いただきました皆さま、的確なサポートとマネジメントをいただきました学会事務局の糟谷様には、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

(編集担当: 大阪公立大学 福島 若葉)



新型コロナウイルス
関連情報

【広報委員会より】

新型コロナウイルス関連情報特設サイト(<https://jeaweb.jp/covid/>)を、2020年3月2日に開設し、疫学的用語等の解説、研究紹介、有用なリンクの他、学会からの要望書を掲載しています。会員からの積極的な情報提供やご意見を期待しています。